



自然の解説者

新年号 [第 78 号] 2023 年 1 月 10 日

NPO 法人

ぐんま緑のインタープリター協会紙

事務局：〒371-0103 前橋市富士見町小暮

2425-28 櫻井昭寛方

電話・Fax 0274-42-2726

<http://inpuri.web.fc2.com/>

編集：総務企画部会

新年にあたり

理事長 関端 孝雄

明けましておめでとうございます。

本年も協会員の皆様には各部会及び事務局等のスタッフとして、また各事業に積極的に参加して、その力を充分に発揮して頂きますようお願い申し上げます。

3 年前異国で発生し瞬く間に世界中に拡散した新型コロナウイルスは、少しずつ姿を変え今やそのオミクロン株は更に多様化して衰えることなく第 8 波に向かいつつあります。また、人口増加に伴い有限である化石燃料を多量に消費して地球温暖化を招き、各所で生態系の乱れを招いています。今回の COP27（気候変動枠組み条約第 27 回締約国会議）は残念ながら進展が見られませんでした。加えて、人間の欲望を満たすための争いが加わり生態系の破壊はいっそう拡大しています。

地質時代に天災が原因の「五大絶滅事件」に続く生物の大量絶滅は、現在人間の諸行動により地質時代に進行した大量絶滅の約 100 倍もの速さで、第 6 回目として進行中と言われます。核兵器をもし仮に駆使した争いが起これば、宇宙にただ 1 つの地球丸はいずれ沈没し、これにより人類を含む多量の、いや殆どの生き物が絶滅危惧種となり、より急速に滅亡するでしょう。決して戦争は起こしてはなりません。

皆様には引き続き新型コロナウイルスの感染に注意され、ご健勝で本会のますますの発展とご活躍を心から祈念いたします。



校庭の樹木 23 ～邪鬼の侵入を防ぐというヒイラギ～

顧問 亀井 健一

友人宅に伺ったとき、玄関わきに葉の縁が鋭い刺になった植物があることに気づきました。触ると刺さるような痛さを感じました。ヒイラギ（柊）でした。葉のふちが鋭い鋸歯になっていることから、邪鬼の侵入を防ぐとされ、魔除けにする風習があり、友人はこの目的で植えたものと思われます。

高崎市立乗附小学校の校庭で子どもたちと樹木の観察をしたとき、ヒイラギが咲いていました。元気な児童が「この枝を玄関につると鬼が入ってこない、おばあちゃんが言っていた。なぜですか。」ぴったりのいい発言です。

ヒイラギは樹高がほどほどで、刈込にもたえ、病害虫に比較的強く、やや日陰でも育ちます。こんな特徴から、庭木や防犯目的の生垣として使われてきました。昔はよく植えられましたが、今はあまり注目されない樹木になってしまったようです。とはいえ、ヒイラギは注目すべき特徴を持っています。

本種はモクセイ科の常緑低木～小高木で、高さは 4～8m になります。葉は対生し、葉身の長さ 3～7cm の楕円形。厚い革質で表面は光沢があります。葉の先と縁はまばらな鋭い刺になっています。しかし、老木の葉は、なめらかな縁です。なぜそうなるのか、若い木のうちは動物の食害の影響が大きく、それを防ぐ意味があるのだろうと言われています。

花期は 11～12 月、葉腋に小さな白色花が密生します。花冠は直径約 5mm で 4 裂。裂片は反り返り。雄株には、長く突き出した雄しべ 2 個と、痕跡程度の雌しべがある花がつきます。この雌しべは機能しないので、この花がつくものは雄株です。一方、別株では、長く突き出した雄しべ 2 個と長い雌しべ 1 個がある花がつきます。雌しべは子房が淡緑色で、ふくらんでいるのでわかります。この花は両性花です。この関係を雄花両性花異株と言います。両性花の株に翌年の 6～7 月、長さ約 1.5 cm（甘納豆型）の紫黒色の果実ができます。ここに上げた写真は長い雌しべがないので雄株です。なお、どういうわけか雄株が多く、果実がつく両性株は少ないようです。

和名ヒイラギは、葉に触れると痛いことから、「ひりひり痛む」の古語「ひひらく」、「ひひらく木」が「ヒイラギ」に変化したようです。なお、セイヨウヒイラギ（西洋柊）はモチノキ科であり、赤い果実がつき、ヒイラギとの類縁性はありません。葉の縁にヒイラギに似た鋸歯があるため和名が似てしまっただけです。



若い木につく鋸歯のある葉



老木の雄花

《トピックス》

11月10日(木) 公益社団法人日本フィランソロピー協会様より、活動資金として50万円ご寄付いただきました。

《活動報告》

自然体験事業⑤「秋の赤城山」 10月2日(日) 受託協力部会

講師：大谷正明、清水岩夫。参加者：一般13名、協会員24名。小沼から長七郎山、小地蔵岳、小沼到着と小沼周辺を中心に実施しました。参加者からは、「たくさんの植物について詳しく説明していただき、よかったです。」「天気もコースも最適で楽しい観察会でした。」などの感想を聞くことができました。(中村)

前橋市委託事業③「ネイチャーゲームと葉づくり」 10月16日(日) 受託協力部会

講師：大島純子、竹之内昭子、長塚宏美、中村久和子。参加者：7家族19名(大人9名、子ども10名)、協会員10名、合計29名。

午前、フィールドビンゴ、秋の自然の紹介、動物ジェスチャーをしました。午後、おおさる山乃家周辺で集めた気に入った葉っぱや花をパウチして思い出のしおりをつくりました。「親子で自然の中でリフレッシュできた。」「素敵な笑顔が見られ、一生忘れない経験になった。」などの感想がありました。(中村)

観音山ファミリーパーク自然観察会「タネのはなし」 10月22日(土) 観音山FP部会

講師：下田重雄、朝山洋子。参加者：一般20名、協会員8名。子供たちも園内にあるタネを集め、いろいろな種類や形におどろいていました。(柳澤)

会員研修7「吾妻溪谷と道陸神峠」 11月4日(金) 会員研修部会

講師：浦野安孫、柳澤一郎、清水岩夫。参加者：17名。

例年の吾妻溪谷観察会とは趣を変え、開花を迎えた「ツメレンゲ」や近縁種の「フジキ」「ユクノキ」の同定等の植物観察と、いにしへの道陸神峠の道を歩く企画にしました。好天の中、絶好の紅葉シーズンの吾妻溪谷で自然の営みを学ぶことができました。(清水)

観音山ファミリーパーク自然観察会「紅葉について」 11月26日(土) 観音山FP部会

講師：櫻井昭寛、櫻井陽子。参加者：一般12名、協会員14名。「子供向け」「大人向け」に分けて案内しました。「子供向け」では集めた葉で葉拓をとりました。(柳澤)

自然体験事業⑥「竹炭焼きとピザづくり」 12月3日(土) 受託協力部会

講師：田村福次、櫻井陽子、大澤ひかる。参加者：一般12名(大人6名、子ども6名)、協会員24名、ボランティア1名。

冬の温かい日差しの中、竹炭焼き、ピザ作り、クリスマスリース作りを行いました。

昼食は、生地からのピザ作り、焼き芋もしました。参加者からのたくさんの差し入れがあり楽しい時間になりました。午後は、用意された材料でオリジナルのクリスマスリース作りをしました。ドラム缶窯に点火後4時間、できあがった竹炭に付着した青色の酸化ルテニウムも観察できました。「親子でものづくりをして楽しい時間を過ごすことができ感謝しています。」といった感想を聞くことができました。(中村)

会員研修8「鹿田山フットパス」 12月15日(木) 会員研修部会

講師：須藤友治、荒木昭彦。参加者：20名。鹿田山周辺の自然環境整備の状況や里山に暮らす人達がその自然を楽しみつつ散策している現場を訪ねました。須藤講師から渡されたフィールドビンゴ『私をさがして!』用紙を、一日中持ち歩き探し回りました。

参加者からは「自然の中に息づく生き物についての解説を現場で聞くことができた」と大変好評な企画でした。(清水)

森林整備 柏倉町の森 インプリの森部会(酒井)

10月8日(土) 柏倉町の森間伐作業開始 参加者5名 25本伐採

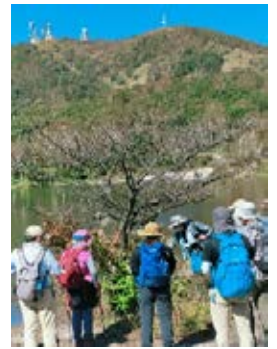
10月15日(土) 参加者8名 39本伐採、 10月22日(土) 参加者3名 18本伐採

11月9日(水) 参加者3名 19本伐採、 11月12日(土) 参加者7名 29本伐採

11月19日(土) 参加者9名 78本伐採、 11月26日(土) 参加者6名 59本伐採

12月3日(土) 参加者4名 64本伐採

12月7日(水) 参加者4名 32本伐採 間伐作業完了 合計363本伐採



緑の窓

海の楽しみ

第19期生 国安 俊夫



現役時代国立公園の管理に長年従事してきましたが、わが国の国立公園の半分は沿岸域に公園区域が指定されていて、海と接する機会が多くありました。

最初に海岸の面白さに気づかされたのは、30歳になって3年間過ごした天草（雲仙天草国立公園）です。1980年7月熊本空港から天草本渡へ着任のため、宇土半島を通るバスの中から見た有明海。海岸から沖合に向け、ずらっと海中に電柱が並んで立っている景色は忘れられません。何故電柱が海の中に建っているのかご存じですか？実は潮が引くとそこに道路が現れるのです。ノリ養殖に携わる漁師は干潮時にも船を出せるようその先端に漁船を係留し、そこまで行くために敷設されたものです。太平洋側では最大でも1～2mと言われている潮汐（海面水位変化）が6mにもなる日本の有明海の干潟景観は驚きでした。そして、その干潟に生息するハクセンシオマネキ（白扇潮引き：オスの片方のハサミが白色で巨大化していて盛んにそれを振ることから名づけられた）の生態について研究者から直接教わる機会もあり、10mしか泳げない私でも、3点セットを付ければ何時間でも遊べるスノーケリングの楽しみも知りました。

その次に行った和歌山県新宮市（吉野熊野国立公園）では磯（潮だまり）の楽しみを満喫、わが国最北の稚内（利尻礼文サロベツ国立公園）では西海岸に40kmも続く砂浜と砂丘林の雄大さ、また初冬のハスの葉氷（港の海表面にハスの葉状の水）と海ガモたち、そして沖縄（西表国立公園）ではマングローブ林とサンゴ礁の生き物に接することが出来、新聞の潮時表に目を通すことが日課になっていました。

自然環境も良く終の棲家として群馬県を選びましたが、唯一海に面していないことが玉に瑕。特にこの2年はコロナで県外へ出かけるのを自粛しておりフラストレーションがたまっています。



豆知識

雑草の話 27 カタバミ その2

理事長 関端 孝雄

カタバミの変種として、カタバミと同じ黄色の花を付け、葉が赤紫色をしている**アカカタバミ**（図3）があります。また、同じく変種で地上茎が立ち上がる**タチカタバミ**があり、この種は、これから下に記す**オッタチカタバミ**とは別の種類です。

この他にカタバミより葉が大形で、淡虹紫色の花で、白色の葯を付ける**ムラサキカタバミ**（図4）があり、中々見応えがあります。このカタバミはどうしたことが種子を作らず、その代わりに地下に球形の鱗茎をそなえ多くの子球を作って無性繁殖をします。これと同じ繁殖をするものに**ムラサキカタバミ**に比べて虹紫色の花弁の基部が濃虹色で黄色の葯を持つ**イモカタバミ**（図5）があります。これは北米からの外来種で、ムラサキカタバミとも違い球形のイモ（塊茎）を作り、種子を作りません。沢山の塊茎を作りそこから葉を出して繁殖するので、**フシネハナカタバミ**の名があります。帰化植物としてはこの他にも何種かあるようです。園芸品種には属名をそのまま種名にしている約20種があり、**オキザリス**（**ハナカタバミ**）と呼ばれ栽培されています。

最近気が付いたことに、地上茎が立ち上がっていて黄色の花を付ける**オッタチカタバミ**（図6）を道ばたで見えるようになりました。茎の節間が短く枝が放射状に出ています。北米原産の帰化植物で、道路に沿って広がり、カタバミよりも遙かに数多くの株がたち並んでいます。我が家の狭い庭にも進出して来て、一寸の除草では追いつかない状態です。小葉の基部を上から見ると毛に覆われた紅紫色の小点が見えます。カタバミと比べ茎、葉柄、葉の縁などに白毛が多く、他種と異なり果柄が斜めに下がる傾向があります。果実は直立し、托葉は目立ちません。冷飯草履（藁で作った粗末なぞうり）のような形の種子には表面に白く見える溝が多数あります。



図3. アカカタバミ



図4. ムラサキカタバミ



図5. イモカタバミ



図6. オッタチカタバミ

「連雀町」って「レンジャク」のこと？

「連雀」とは本来、渡り鳥の連雀を指していました。昔、背負子（しょいこ）の肩に当たる部分を「連尺」といいました。それを用いる行商が渡り鳥のように見えたことから行商人のことを「連雀衆」などと呼んでいました。連雀衆の多く集まる場所がやがて固定され、江戸時代から商業地や町として栄え、「連雀町」といった地名になりました。前橋市はなくなりましたが、高崎市などにその地名は残っています。その言葉の元になる「レンジャク」が厳冬期になると現れます。赤城山麓や大室公園にはヒレンジャクが渡来します。キレンジャクは現れたことがないようです。

赤と黄色の色が違うだけ？

キレンジャクとヒレンジャクは色が違うだけではなく、大きさ、生息域も違いますので別種です。日本に現れる場合、東日本にはキレンジャクが多く、西日本にはヒレンジャクが多いと言われています。また飛来する数は年により増減が激しく、ほとんど見られない年もあります。ヤドリギ、ナナカマド、ズミ、ピラカンサなどの実を食べます。果実がなった木を見つけると、そこに何日も留まり、実がなくなるまで食べます。繁殖地はヒレンジャクが東アジアの限られたエリアに生息しているのに対し、キレンジャクは北半球（アメリカからユーラシア）の寒帯（最暖月平均気温が10度未満の地域）に広く生息しています。繁殖は一夫一妻制で、巣作りは主にメスが行います。抱卵はメスのみですがオスがメスに給餌します。また雛を育てるのは両者で行います。ヒレンジャクは生息域が限られ、中国やロシアの森林開発によって環境悪化が深刻となり、絶滅が危惧されています。大事にしたいですね。



ヒレンジャク



ヤドリギの実を食べるヒレンジャク

《写真：大室公園にて》

〈協会の声〉

子供たちに「自然の知恵」を伝えたい

第19期生 重田 優子

私は赤城山で雲海を見ることに狂っていた時期があり、足繁く鳥居峠に通っていました。その時に「みるこのカフェ」に出会いました。気楽に立ち寄れるカフェとしてお邪魔しているうち「大人のための自然教室」を受講し、協会員になっていたという次第です。今年度初めて中学生の自然体験学習に参加させていただきました。ある中学校でネイチャーゲームをしたくないと動かない生徒さんがいました。でもチラリと見えていた人工物が気になっていたようだったので



鳥居峠の雲海

「バレバレだねえ」と声をかけ一緒に見ていると、ゆっくり歩いて探し始めてくれました。その後草に紛れてしまうバツタをタブレットに収めようと一生懸命でした。彼の学習の役に立てたかもしれないという喜びがこれからの活動の励みになりました。

緑のインタープリターとしての知識はまだまだですが、木の『気』がもたらす気持ち良さや癒やしはわかります。自然を大切に守っていききたいという気持ちも強く持っています。これからの将来を担う子供達にもそのようなことを伝え自然の知識を身につけてもらえるよう活動に取り組んでいきたいと思ひます。協会員みなさま、これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

〈協会が実施する事業・研修会等〉

| 実施日 | 内容 | 会場 |
|--------------|------------------------|---------------|
| 令和5年1月21日（土） | 会員研修9「冬の野鳥観察」 | 大室公園 南口駐車場集合 |
| 令和5年2月19日（日） | 「大人のための自然教室」修了式 | 県立観音山ファミリーパーク |
| 令和5年3月11日（土） | 会員研修10「経験者向け：スノーシュー研修」 | 玉原高原 |

〈編集後記〉今号より協会紙「自然の解説者」の編集を担当する14期生の松村辰博と申します。事業・研修会等に参加し、自然と人・動物・植物の密接な関係をたくさん勉強させて頂きました。『何か“協会”に協力できることはないか』と思っていたところ、「総務の手伝い」の依頼を受けました。不安でしたが、「私にできることが有れば」と引き受けました。編集作業は初めてですが、皆様の指導・協力を頂き、対応していきたいと思ひます。宜しくお願ひ致します。